

「夢のカリーテンブル完成間近に！」



過日、11月15日カリーテンブル完成間近なブダガヤに4度目の視察に行っていました。

今回は、一人でなく本堂に安置するご本尊様を彫っていただく仏師の前田さんと共にいってまいりました。前田さんには、建設中のカリーテンブルを見てブダガヤ

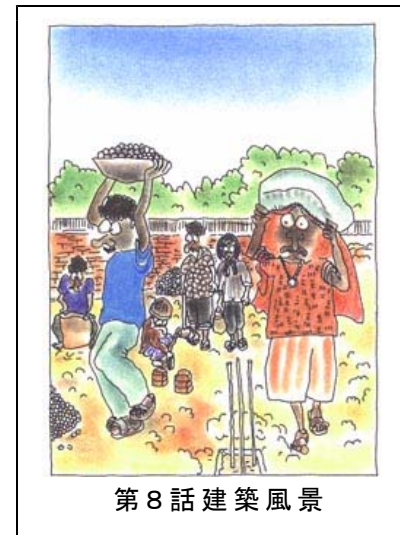
の空気を感じていただき、その上で彫って頂きたいという理事達の思いもあって、ご同行していただきました。前田さんの、感動のインドの様子はこの後の「私の見た心の故郷インド」で読んでいただくとして、現地報告を致します。

建物は、95%が完成をしており後は、設備工事が残っている程度です。ロビーの床の大理石は磨きかけられ、天井のライトの光が反射して輝いています。庭の芝生は青く、壁に沿ってバナナやマンゴーの木が植わっています。屋根は青銅色をしていてちょっとしたリゾート地のコテージの様な雰囲気があります。夜ともなると外塀の上に並ぶランプが灯り異国の雰囲気が漂ってきます。隣の日本寺に駐在されている尼僧さんから「かわいいお寺ですね。」と言ってお見せできないのが残念です。今頃現地では、12月31日のカリーパーティー・落慶式に向けて、慌たしくみんなが動いていることでしょう。

日本からも、我々7人の僧侶のほか五十数人の方々が27日・29日・30日と次々に関空・成田から出発されます。どんなカリーパーティーになるのか楽しみと不安が入り交じっております。又来年、このニュースレターでその模様をご報告いたしますので楽しみにおまちください。古本 記



「カリーテンブルへの道！」が朝刊に掲載される。



第8話 建築風景

宿坊を作る会の為に、日夜奔走してくださっているイベント・プロデューサーの岡田稔さんが文を、ポストカードの画を描いてくださったイラストレーター茶畑和也さんが挿し絵を描いて、今年9月5日より毎日新聞「情報ワイド 列島・東海」の紙面に「カリーテンブルへの道」と題して掲載（毎週火曜日全19話）されています。

岡田・茶畑両氏に、昨年12月インドの現地を視察していただいた時のエピソードや会の活動の様子などがユーモラスに描かれています。また2001年1月9日には、カリーパーティーのルポが大紙面で掲載されます。

名古屋東海以外の方々には、読んでいただくことができないのが残念ですが、名古屋東海地区の方にはご感想などを是非お聞かせ願いたいものです。

「夢のカリーテンブル建立に、1,319人の善意が寄せられています。」

これまでに「夢のカリーテンブル建立資金」にと、全国各地より1,319人の皆様から、総額¥14,336,756-(12/10現在)のご寄付を頂きました。！ありがとうございました。まだまだ、目標額にはとどいていませんが、何とかここまで来ることができました。これも、皆様のおかげと感謝しております。

2001年のオープン後の事を考えますと、現地での寄付金だけに頼ることはできません。これからの維持について、会でも検討を重ねております。皆様の善意を、次世代の子らへと受け継いでゆくためにも、重ねて皆様のご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

「私の見た心の故郷インド」

仏師 前田 昌宏 記

10月15日から21日までの間、カリーテンブル視察の古本理事に同行させていただきました。私は、高校生の頃、手塚治虫の『ブダ』を読んでから、いつかきっとインドへ行くぞ！と心に決め、訪れることを夢見ていました。そんな私が、いざ出発となると期待一杯の胸とは裏腹に、とんでもない異国に行くんだという不安が入り交じりました。そんな私が、インドのカルカッタに到着したとき、慌ててしまいました。



空港の外に出たとたんお偉いさんを出迎えるかのような黒山の人だかりにありました。これは、旅行客の荷物を持ってチップを貰うために集まっていて、噂ではよく聞いていたもののあまりの迫りにビックリしてしまいました。空港ですでにインドの迫りに面食らった私は不安を募らせつつも、列車に乗るまでの待ち時間、余裕の古本理事についてカルカッタの市内観光へと向かいました。



インドという国・人・物・・・何もかもすべて自分に焼き付けて仏様を彫りたいと思っていた私は、恐る恐るビデオを撮り始めました。そのうち、「ソニー、ソニー」と言い寄ってくるインド人にも少し慣れ、そんな状況も逆に楽しみさえ覚え始めました。

夕刻カルカッタを発った列車は、23時過ぎにやっとガヤ駅に着きました。ブダガヤへは真夜中に到着した私たちでしたが、すてきな笑顔でオームさん、スタッフの皆さんの歓迎に心温まるものを感じ、緊張の糸がほぐれてきました。

突然オームさんが「カリーテンブル見ましょう。！」と言い出しました。心の中では「早く見てみたい。でも、こんな夜遅くから・・・」と思いつつも、はじめての視察が始まりました。カリーテンブル内はもちろんのこと、夜だというのに庭まで視察しました。このとき、私はまだ理解できていなかったのですが、翌日どうしてこんな夜中から視察が始まったのかを目の当たりにする事になります。

翌朝、ブダガヤのはじめの朝を迎え、広大な地に大きく陽の光に照らされたカリーテンブルを確認しました。そして、いよいよ本格的な視察が始まりました。

まず本堂へ行くと、入口のドアにやすりをかけている人が数人い





ました。中年の男性、若者問わず同じように一生懸命やすりをかけつづけています。年功序列が基本の日本ではまず考えられない光景に少しとまどいながらも、あまりにも一生懸命な作業風景を見て思わず自分に問いかけたくなるものがありました。そして、本堂の台座の下に写経等を納めるところを作りたいという案がでたのですが、空洞をつくる担当の方がすぐにノミを入れ、作業に取りかかってくれました。「では、〇日の〇時からとりかかります」という日本のシステムでは考えら

れない光景に出くわし、ここでも仕事への熱心さに「すごいよ」と思わず口からでてしまう程のものでした。

そして宿坊へと案内されていたのですが、庭には暑い中一生懸命に草の手入れをし続ける人、カーテンの屋根のペンキを手で混ぜている人、また屋根に登り、塗っている人、ドアの鍵だけをもちひたすらカーテンを守る人、大理石をひたすら磨き続ける人・・・それはカーテンがたくさんの人に守られていることを目の当たりにするものでした。そして、毎日こうしてたくさんのブッ



ダガヤの方に守られ、「村一番のお寺に」という思いを寄せ建築されていることをオームさんは、到着した私たちに一番に伝えたかったことに、私はやっと気づいたのでした。



カースト制で成り立つインドでは、それぞれの階級ごとに仕事が決まれ、「この人にはこの仕事」というものが生まれながらにして決められていることは重々承知の上だったものの、与えられた仕事を人に見てもらって自信をもって「これだけがんばりました」と胸を張って言える程に丁寧にこなし、早朝から深夜にかけて文

句ひとつ言うことなく勤めに取り組む姿に私は脱帽するしかありませんでした。

怖い思いをするのではないかと、汚さに何か病気になるのではないかと・・・など心配で始まった私の初めての視察もブッダガヤのマスティブール村というところにたどりつき、カーテンを通してブッダガヤのみなさんと交流した時、怖い、汚いなんてものはどこかへ吹っ飛び、私の心の中はとても癒され、何か言葉には表すことのできないパワーをいただいたような気持ちになりました。インドの大地はすばらしい！しかし何よりもブッダガヤのみなさんの笑顔がとても偉大なものでした。今の私は、「もう一度」とは言わず何度でも第二の故郷として、このブッダガヤの地を訪れたい気持ちでいっぱいになったのです。

お釈迦様の聖地であるブッダガヤ、素晴らしい笑顔の人たちのいるブッダガヤにカーテンが建立されることはすばらしいことです。私も、ブッダガヤの皆さんの一生懸命さに恥じることのない仏様を創りたいと心して思いました。



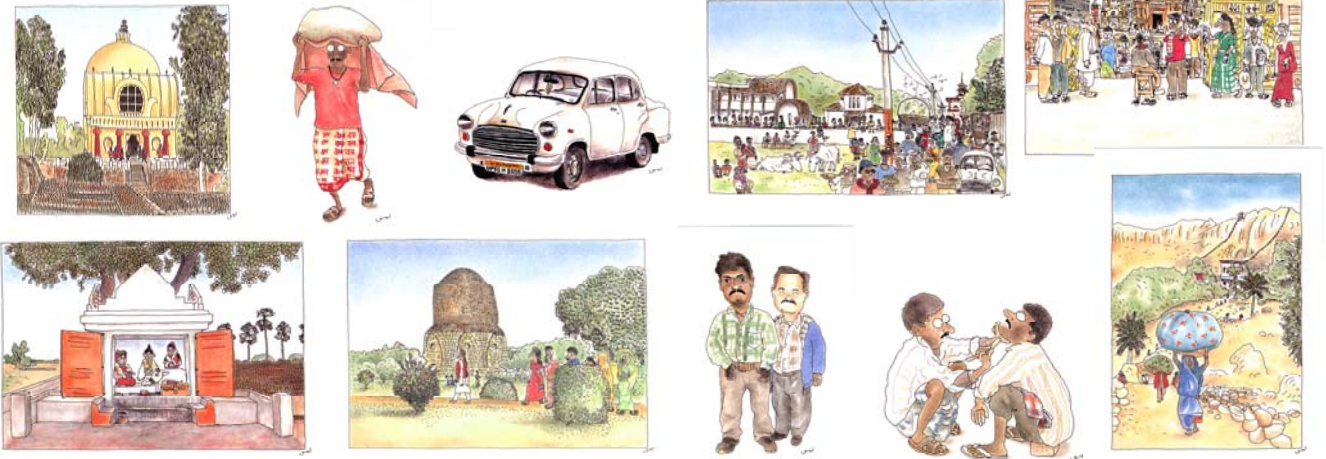
” 四大仏蹟イラスト紀行 ”

チャリティーポストカード 発売

「ブッダの里～遙かなるカーテンへの道！」

雑誌エルジャポンやクロワッサンなどで活躍中のイラストレーター茶畑和也さんによる、ブッダガヤと四大仏蹟等を交えたチャリティーポストカードを好評発売中です！。

(10枚1組¥1,000-、送料はお客様のご負担となります。)



ほのぼのとしてちょっとユーモラスなタッチで描かれた作品では、これまでに無い優しく温かな包容力が感じられる、もう一つのインドにきっと出逢えるはずですよ。

●ご購入のお申し込みについて

「ハガキ」の場合・・・官製ハガキに住所・氏名・電話番号・ご購入セット数を明記の上、〒527-0073 八日市市蛇溝137、「お釈迦様の聖地に宿坊を作る会」宛てご郵送下さい。

「FAX」の場合・・・FAXにて住所・氏名・電話番号・ご購入セット数を明記の上、FAX/0748-23-6632 「お釈迦様の聖地に宿坊を作る会」宛てご送信下さい。

「Eメール」の場合・・・カーテンのホームページ<http://www2u.biglobe.ne.jp/~curry300/> から事務局宛てのメールにアクセスしていただくか、直接事務局ft1113@msf.biglobe.ne.jpにメールで、住所・氏名・電話番号・ご購入セット数を明記の上オーダーしてください。

「関空・成田から、いざカーテンパーティーへ」

このカーテンニュースがお手元に届く頃、27日・29日・30日それぞれツアーを組み関空・成田から、大晦日に行われる仏心寺の落慶式、世紀をまたいだ大カーテンパーティーに参加するため出発を致します。

7人の僧侶達も、式典に必要な道具類・おみやげ・記念品等々、これらの調達整理に大わらわです。如何にインドにあるものを利用して、日本から持って行く物を少なくできるか無い知恵をしばって悪戦苦闘しております。

その中でも、一番に大きくて重いのが本堂の正面にかがげます『仏心寺』と書かれたタテ60センチ×ヨコ120センチ×厚み3センチの額です。当会の加藤理事長に書いてもらった字を仏師の前田昌弘さんに彫っていただいたものです。これが約30キロほどの重さがあり、飛行機を降りた後は宅急便のないインドでは手で持って行くしか方法がありません。一緒に行く大学生諸君の力だけが頼みの綱です。

あんなこんなで今回の旅は、かなりの珍道中になることは間違いありません。どうぞ、無事に落慶式・カーテンパーティーが行われますことをお祈りください。

それでは、行って参ります。

日本においでの皆様方、良き21世紀の門出をお迎えください。